

# コロナ禍における養護教諭が行う健康相談の現状

出川久枝\*・林 典子\*\*・安藤光代\*\*\*

## 1. はじめに

2019年12月に、中国武漢市で発見された新型コロナウイルスによる感染症は、わが国でも2020年1月に第一例が報告され、まもなく3年が経とうとしている。当初、夏になれば収束するのではないかと言われながらも、この3年間、流行は継続し、今や第8波の流行である。

2020年2月27日に感染拡大防止のため全国一斉の臨時休校を要請する方針が内閣総理大臣より示された<sup>1)</sup>。これを受けて3月2日から、全国の学校が休校となった。学校関係者のみならず、全ての人が初めてのことで、その影響は多大であったと考える。卒業式はどのようにするのか、入学式はどのようにするのか混乱していた。そして休校期間は2度にわたって延長され、結局、5月末まで休校が続いた。その間、児童生徒の心身の健康管理を行う養護教諭の戸惑いも大きく、学校再開に向けて何をすればよいのかそれぞれが模索していたと思われる。

そのような中、日本健康相談活動学会が緊急アンケートを実施し、「COVID-19に伴う養護教諭の実践に関する緊急アンケート報告書（第1版）」<sup>2)</sup>を作成した。報告書では「新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、全国各地で多くの養護教諭、学校保健関係者が尽力していること、また、誰もが体験したことのない感染症対応ということで、文字通り暗中模索の中、それぞれの経験、縦横のつながりを駆使し対応していることが手に取るように伝わってくる」と述べられている。健康診断はどのようにするのか、救急処置はどのようにするのか、保健室経営はどのようにするのかなど、情報交換、情報共有された。保健室の感染対策としては、「保健室のゾーニング（けがと体調不良者の対応場所を分ける）」「ビニールによる仕切り」「発熱者は別室で対応」などの工夫例が挙げられているのを見て、学校再開後の保健室は、これまでとは様変わりして、本当に発熱している子どもだけが来室し、最大の感染対策を行っていくというイメージであった。

ところが、夏季休業中にあったA市の養護教諭の研修会に研修講師として参加した際、コロナ禍において行った子どもたちの心のケアや健康相談について尋ねると、様々な健康相談事例に対応している養護教諭が多くおり、校内の消毒作業等の感染対策に追われながらも、子供の心に向き合わざるをえなかった姿を捉えることができた。そこで、その健康相談事例をまとめることにより、コロナ禍における養護教諭の努力の一端を記録に残しておきたいと考えた。

本稿での「養護教諭が行う健康相談」とは、「養護教諭が職務の特質や保健室の機能を生かし、児童生徒のさまざまな訴えに対して常に心的な要因や背景を念頭において、心身の観察、問題の背景の分析、解決のための支援、関係者との連携など心や体の両面への対応を行う活動」<sup>3)</sup>である。

## 2. 方法

### 2-1 対象者

2020年度～2022年度に、A市養護教員経験者研修会（I）[養護5年研]を受講した養護教諭45人（2020年度15人、2021年度16人、2022年度14人）である。その校種は、小学校33人、中学校10人、特別支援学校2人である。

\* 東海学園大学教育学部 \*\* 元東海学園大学 \*\*\* 名古屋市教育センター

## 2-2 内容

研修「養護教諭が行う健康相談」の事前課題として、「養護教諭が行う健康相談事例」「養護教諭が行う健康相談で困っていること」「コロナ禍において行った子供たちの心のケアや健康相談事例」の提出を求めた。「コロナ禍において行った子供たちの心のケアや健康相談事例」では、保健だよりや掲示物をはじめとした保健教育に関する取組16件、「心と体のチェックシート」を活用して行った健康観察等保健管理に関する取組18件、健康相談事例25件が挙げられた（複数の取組の記述あり）。その中の「コロナ禍において行った健康相談事例」25件（小学校17件、中学校7件、特別支援学校1件）をまとめた。さらに、「コロナ禍において行った子供たちの心のケア」に関連して記述された養護教諭の気付きについてもまとめた。

## 2-3 倫理的配慮

研修会当日、受講者に、この事例をまとめることを説明し、承諾を得た。

また、研修の事前課題として事例を記述する際には、プライバシー保護に留意した記述をするよう依頼をして事例提出をさせている（表1）。

表1 事例を記述する際のプライバシー保護のための留意事項

- ・ 事前提出資料は、受講番号のみ記載し、自分の校名・氏名は書かない。
- ・ 個人名だけでなく、男女、イニシャルも書かない。（A児、生徒B等とする。）
- ・ 外国籍の場合は、その国名は書かない。
- ・ 特定されがちな病名、具体的な職業名は書かない。
- ・ A市相談センターや少年センターは「相談機関」とする。

## 3. 結果

### 3-1 「コロナ禍において行った健康相談事例」

#### 3-1-1 健康相談事例数

取り上げた事例総数及び概要は25件（小学校17件、中学校7件、特別支援学校1件）である（表2）。

#### 3-1-2 健康相談対応期間

対応を始めた時期は、休校中2件、再開後7月まで20件、同年夏休み明け1件、2022年5月1件、不明1件である。25件中1件のみが2022年の事例であるが、他の24件は2020年の事例である。（時期が明記されておらず「不明」の1件も、その内容から2020年の事例と判断した。）

#### 3-1-3 来室理由または関わりのきっかけ

体調不良等を訴えての来室14件、保護者または本人からの相談希望6件、登校渋りで登校時に対応3件、担任からの相談1件、健康診断後の健康相談1件である。

#### 3-1-4 対応における連携・協働

記述された内容から読み取れる主な対応者は以下の通りである。担任18件、保護者16件、管理職7件、スクールカウンセラー9件、スクールソーシャルワーカー（子ども応援委員会所属）3件、相談機関3件、他校（兄弟姉妹が在籍する学校）2件、学校医1件と、学校内外多岐にわたっている。子ども応援委員会とは、市内をいくつかのブロックに分け、各ブロックに活動の拠点となる事務局校を設置し、HP（総合援助職）、SC（スクールカウンセラー）、SSW（スクールソーシャルワーカー）、SS（スクールセクレタリー）、SP（スクールポリス）を常勤職員として配置し活動を行っている組織である。

養護教諭の複数配置については、表2のNo.25（特別支援学校）は常勤養護教諭との複数配置、No.5、10、11（小学校）、No.17（中学校）は非常勤養護教諭の配置による複数配置校である。

### 3-1-5 問題の要因として考えられること

家族との関係悪化・トラブル、生活の乱れなど家庭に起因する問題が10件と最も多かった。次いで、感染症やその他の不安6件、発達障害、ゲーム依存、運動不足などの本人の問題4件、不登校傾向4件、不明1件であった。

### 3-1-6 対応後の変容

対応後の変容は、継続して支援中の事例7件、一旦支援は終了し経過観察している事例8件で、その他の10件については「落ち着いた」「来室はなくなった」「毎日登校できている」など、支援の成果が現れている記述が見られた。

表2 コロナ禍における健康相談事例の概要

No.	校種	来室理由または関わりのきっかけ	概要	対応	要因	養護教諭以外の主な対応者								
						担任	保護者	管理職	S C	S S W	相談 機関	他校	学校 医	
1	小	登校渋り	休校明けから、登校渋り。2年生の現在も登校渋りは続いている。	登校後、保健室で、気持ちを落ち着かせてから教室へ行く。欠席の日は担任が連絡を取り、登校した日には管理職も様子を見る。母親はSCと面談を継続している。	登校渋り (母子分離不安)	○	○	○	○					
2	小	泣きながら母と登校	休校中は今までで一番精神状態が落ち着いていた。今はとても頑張っている(母親談)以前から、登校渋りがみられた。	登校後、落ち着くまで保健室で母親と共に過ごし、その後教室へ送り出す。	登校渋り (母子分離不安)		○							
3	小	登校渋り	休校中は、ほとんどの時間を本人・母・兄の3人で自宅で過ごしていた。学校再開後、登校渋りとなり、2学期後半には、母と離れるとき激しく泣き叫ぶようになった。	担任、管理職、養護教諭、母で、何度か面談を重ねた。	登校渋り (母子分離不安)	○	○	○						
4	小	咳をした後、パニックになり来室	コロナが心配で保護者と登校している。咳をしたときに「マスクに血がついている、私はもうだめだ」と教室で急に泣き叫んだ。	保健室で、本人の気持ちを受け止め、ゆっくりと話を聞き、安心させた。	コロナへの不安	○								
5	小	軽度の頭痛と咽頭痛で来室	学校再開3日目、新型コロナウイルスへの不安が強く、体調不良となった。	休校期間中から、母親から担任へ相談があり、養護教諭にも相談したいとのこと。SCとの面談を勧めたが、断られたため、SCにはアドバイスをもらい、養護教諭が面談している。	コロナへの不安	○	○		○					
6	小	母親から電話相談	休校期間中、食欲がない、寝られないなど不安症状が出ている。	休校中の登校日に来室し、ひとり言のように「心配」「疲れた」と言っていた。再開後、休み時間になるたび来室した。	母子ともに不安が強い		○							
7	小	担任が自傷行為の傷を発見し相談	休校期間中からペン型はさみでリストカットをしていた。母親は知っていたが気に留めていなかった。	保健室来室時には話を聞き、担任と情報共有した。進学先の中学校のSCと週1回カウンセリングを行った。	気が強く、思い通りにならないと衝動的になる	○			○					
8	小	眠い、と来室	コロナ禍で、オンラインゲームをする時間が増え、夜通し通話、課金など依存状態になった。発達障害もあり、気分が波があり、友人とのトラブルから不登校傾向になった。	毎日、来室するので、保健室で話を聞き、食生活、友人関係、ネットトラブル等について継続的に指導した。	ゲーム依存、発達障害	○								
9	小	心と体のチェックリストに相談希望と記入	休校明けから、不安なことがあると息苦しくなることについて、パニック障害ではないかと心と体のチェックシートで相談を希望してきた。	担任と連携し、不安感が強い日は保健室で給食を食べることになった。保護者面談も行い、医療機関を受診した。	感染対策で、給食の量の調節が自由にできないことにより、完食できない不安	○	○							
10	小	気持ちが悪い、給食が食べられないと来室	休校中、中学生の姉が、友達とのトラブルや部活がないことでストレスをため、自傷行為を行い、本児に対してあたっていた。	保健室で、持参した弁当を食べることにした。姉が在籍する中学校の養護教諭へも連絡し、姉の様子も見てもらうことにした。	姉にあたられる	○	○	○				○		
11	小	抜毛してしまうと来室	頭頂部に直径5cm程の円形脱毛が見られた。無意識に抜いてしまうようだ。	学校生活での心配ごとは養護教諭が話を聞いた。内科検診で学校医に相談した結果、児童精神科受診を勧めることになった。	不明	○	○							○

コロナ禍における養護教諭が行う健康相談の現状

No.	校種	来室理由または関わりのきっかけ	概要	対応	要因	養護教諭以外の主な対応者								
						担任	保護者	管理職	SC	SSW	相談機関	他校	学校医	
12	小	保護者から相談	休校期間中に体重が一気に増加したことについて、相談があった	母親と面談し、家庭でも学校でもゆっくり経過をみようという結論に至った。児童にも声を掛け、様子を見ている。	運動不足、ストレスによる過食		○							
13	小	遅刻、毎日検温忘れて来室	以前からネグレクトを疑われる家庭であり、休校期間中に生活習慣が乱れが顕著になり、再開後、遅刻が多くなった。	以前から繋がりのある相談機関の職員から、登校するよう働きかけてもらった。担任と相談し、生活習慣を立て直すカードを作成した	生活習慣の乱れ	○						○		
14	小	休校期間中に、保護者から相談	子の腹痛はストレスからであると不安になった保護者から相談があった。登校への不安もあった。	保護者と面談し、安心させる言葉がけに努めた。	保護者の不安		○							
15	小	本人から相談希望	休校期間中、兄と二人きりのことが多く、性的虐待を受けていた。	初回の面談は、養護教諭とSCで行った。その後、本人の理解を得て、管理職に報告。その後、兄相、子ども応援委員会、区役所民生子ども課等と連携し、ケース会議も行い、家族支援を継続。	兄から性的虐待	○		○	○	○	○			
16	小	教室で給食が食べられず早退	休校中の出来事やコロナ禍の影響により、夏休み明けから、教室で給食を食べることができなくなり、欠席・早退が増えた。翌年度も週1回の保健室登校が続いている。	初めは、保健室の中で、隠れて過ごす様子だった。教頭、教務主任、担任、養護教諭、SC、保護者が連携して対応している。相談機関も訪問し通所予定。	不登校傾向	○	○	○	○			○		
17	小	「友達とうまく関係が築けない」と相談	休校時に、ゲームやネットに没頭し、友達とのやり取りもSNSが多くなったことにより、対面での友人関係に悩んでいる。	保健室で、本人の気持ちを受容しながら、対面でのコミュニケーションの大切さに気付かせるよう指導。	ゲーム、ネット、SNS時間の増加		○							
18	中	体調不良で来室	休校中、両親が不在のため世話をしていた異父の妹2人のうち一人が乱暴でストレスフルの状態。家に帰りたくないという。	担任、管理職、SCに報告。管理職が妹が在籍する小学校へも連絡。担任養護教諭から声を掛け継続的に支援。	妹の世話	○	○	○	○				○	
19	中	だるさを訴えて来室	父親はコロナの影響で退職し、自宅にいる。母親は要支援者。夕飯を食べていない、入浴していない状況もあった。	担任と相談し、SCに協力依頼をした。週1回SCと面談を継続。その後、子ども応援委員会のSSWと連携し、社会的支援に繋げた。	父親が失業	○		○	○	○				
20	中	体調不良で来室	外出自粛や休校で母（精神疾患）との関係に悩んでいた。	子ども応援委員会のSSWと連携し、家族支援。SCにアドバイスを得ながら、本人との面談を続けた。祖母宅から通学することになった	母が精神疾患	○	○		○	○				
21	中	体調不良で来室	休校期間中に別居していた母が家に戻り関係不和。家に帰りたくない。	週2回ほど来室するので、リラックス法を一緒に考えた。	母親の姉妹喧嘩に巻き込まれる									
22	中	体調不良で来室	弟が休校と外出自粛によりゲーム依存になり、その影響で体調不良になった。	本人も弟も発達障害があり、母も困り果てている。保健室で、生活を振り返らせる指導を継続。	発達障害、弟がゲーム依存		○							
23	中	頭痛・胃痛で来室	家庭でのストレスがあるが、ストレス発散方法が、外出やカラオケボックスで歌うことだったため、ストレス対処がうまくできていない	来室時は、保健室で本人の話を傾聴。いつでも話を聴くことを伝えた。	家庭のストレス									
24	中	不安になると涙が出る、と来室	休校明けから、友人関係の悩みがあり、学校で不安になると勝手に涙が出てくると訴えた。マスク越しに自分の悪口を言われている気がする、表情や口の動きもわからず対応の仕方がわからないという	担任と連携して対応にあたる。保護者とも面談した。	マスク着用の弊害	○	○							
25	特	身体測定で体重減少	身体測定で、前回より体重が7.3kg減っていた。休校期間中もパニック発作があり、下痢が続いていた。母親もメンタルヘルスに関する課題を抱えている。	担任、SCと情報共有しながら、養護教諭による面談を継続。	母が精神疾患	○	○		○					

### 3-2 「コロナ禍において行った子供たちの心のケア」に関連して記述された養護教諭の気付き

コロナ禍において養護教諭として日々、子供たちを見る中で気付きも記述されていた(表3)。2021年度、2022年度は、「不登校や登校渋りが増えたと感じる」「不定愁訴を訴えての来室が増えた」「親子や兄弟の喧嘩が増えている」など、子供自身の問題や生活背景に関する事柄が多かったが、2022年度では、マスクに関する事柄(表3下線部)が多いことが特徴といえる。長いマスク生活が心身に与える影響は大きい。

表3 コロナ禍における子供たちの様子に関する養護教諭の気付き

2020年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>再開後、不定愁訴を訴えて来室する児童が増えてきたように感じる</li> <li>休校期間中に生活リズムが乱れたことによって、気持ちが不安定になる生徒が増加した</li> <li>体調不良の生徒は休養させず早退させるという学校のルールになって、体調が悪くても教室で我慢して過ごす生徒が増えた。</li> <li>家で過ごす時間が増えたため、親子や兄弟の喧嘩が増えている家庭が見受けられる</li> </ul>
2021年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>休校があったことで、不登校や登校渋りが増えたように感じる(2人)</li> <li>学校再開から数週間たった頃から、登校渋りが増え始めた。一時的なものも含め、5名保健室登校となった</li> <li>テレビやネットのニュースを見て、過度に不安を感じている児童がいた</li> <li>学校再開当初は、低・中学年は「眠い」、高学年は「気分が乗らない」などの抽象的な理由で来室する児童が増えた</li> <li>心と体のチェックシートの点数は、学校再開後が一番高く、徐々に減少していった。</li> <li>家庭環境が複雑な児童の中には、休校で、自宅にいる時間が増えたことで、辛い思いをした児童もいた。</li> <li>長期間の休校は、児童に様々な影響を及ぼすことを実感した。大人でも辛いと感じることがある中、多感な時期の児童の心や体への負担は大きい。</li> </ul>
2022年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>熱中症予防のためマスクを外す必要性についての指導後、<u>コロナが心配でマスクを外せない、マスクを外す自分の顔に自信がもてない</u>、という声があった。一方で、マスクをせずに大声で話すような感染防止を配慮できない児童がいる。</li> <li>不安な気持ちから、過剰に手洗いする子、<u>マスクを取っているときは口をぐっと閉め絶対に話をしない</u>子がいた。</li> <li>コロナ禍での生活が窮屈なこと、<u>マスクを付けていないと落ち着かない</u>ことについて相談があった。</li> <li>歯科健診時にマスクを取るように指示した際、<u>マスクを外しても健診の直前まで手で口元を隠す</u>児童が、高学年で多く見受けられた。</li> <li>コロナ禍において、気持ちが不安定になり、体調不良を訴えて来室する児童の数が増えている。話を聞くと、SNSに関するトラブルや対人関係の問題で悩んでいる児童が増えているように感じる。</li> <li>保健室登校の児童には、保健室でもタブレットを繋いで、教室の様子や板書を見えるようにした。</li> <li>休校期間の影響かSNSに関する課題や、睡眠不足、肥満など生活習慣の乱れによる健康相談の事例が多くあった。</li> </ul>

## 4. 考察

### 4-1 休校の影響と今後の学校生活

3年間にわたって、「コロナ禍における健康相談事例」の提出を求めたが、3年目になると事例数が減っていた。2020年度の研修会においては15人の受講者から10件の健康相談事例が挙げられ、翌2021年度は16人の受講者から11件の健康相談事例が挙げられたが、2022年度は14人の受講者から4件の健康相談事例が挙げられるにとどまった。この研修会は夏季休業中の8月に実施しているため、2020年度は、学校再開後2か月足らずと対応期間が限られていることもあったが、短期間に多くの対応を行っていた。2021年度の実例も、その多くは2020年の対応事例であった。新たな感染症の流行に加え、誰も経験したことがない長期の休校の影響は大きく、学校が再開されてもマスク着用や三密回避、黙食、行事の中止などの制限が余儀なくされ、子供も保護者も「不安感」が強かったことが事例からも読み取れる。2022年度になると、コロナ禍も3年目となり、「コロナ禍」が直接的な要因と考えられる事例が挙げられることが少なくなったことは「withコロナ」の新しい生活様式を受け入れているからではないかと考える。しかし、マスク着用で相手の表情が読み取りにくくなってしまったことや、人との距離を取った教育活動、そして急速に進

んだICT教育など、心身の健康に影響を与える問題は新たに起きてきており、今後これらに対応した健康相談も求められるであろう。

#### 4-2 問題の背景として考えられること

問題の背景として考えられることは、家族との関係悪化・トラブル、生活の乱れなど「家庭の問題」が最も多かった。これは、休校や外出自粛によって家族と過ごす時間が増えたためであると考えられる。

精神疾患をもつ母親の場合や、問題のある兄弟姉妹との関係性では、本人が家族の世話をしないといけない状況（ヤングケアラーの問題）を理解した上で、適切な支援が必要になる。また、ネグレクトや性的虐待の事例も子どもの安全を確保し社会的支援に繋げなければならない。健康相談において、スクールカウンセラーとの連携は多くされているが、今後は、社会的支援に繋げる点から、スクールソーシャルワーカーと連携できるような体制づくりが望まれる。

また、家族とのトラブルもありながら、本人に発達障害の傾向が見られたり不登校傾向であったりと、その要因となる背景は複合的である。今回の分析では、健康相談事例の記述に基づき、その要因を各事例一つに絞ってまとめたが、支援や対応を進める中で他の要因が明らかになってくることも十分考えられる。子供たちが抱える問題は、年々多様化・複雑化しており、適切な健康相談を進めるためには、発達障害、不登校、いじめ、虐待、ヤングケアラー、LGBTQ、精神疾患等様々な問題について医学的な知識も備えた上で、校内でコーディネーター的役割を生かして対応を進めていかなければならない。

#### 4-3 健康相談の重要性

新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のための休校期間中、養護教諭は、学校の感染対策を教職員間で共通理解できるよう働きかけ、感染対策のための環境整備を行っていた。学校再開後も感染対策が優先される中で、健康相談の対応は「待ったなし」の状態であった。「体調不良者はまず別室対応」「体調不良者はすぐに家庭連絡・早退」という校内の感染対策のため、保健室に来ることさえできない子供たちもいた。養護教諭も、学校全体の感染対策の中で、保健室で子供たちの心に向き合う健康相談をどのように行っていたらよいか悩みも多かったことが推察できる。「心と体のチェックシート」を手掛かりに心身の健康状態に気を配り、子供たちの気持ちの不安定さを察知した場合は保健教育（保健日よりや掲示物等）に反映させながら、保健室でも個別の対応を進めていたと思われる。感染対策を行いつつ、子供たちの声を聴き、関係者と連携を取って対応したことで救われた子供も多く、養護教諭が行う健康相談の重要性を改めて感じた。

#### 4-4 本研究の限界と今後の課題

本研究は、研修会の事前課題として提出された健康相談事例をまとめている。事例の記述に関しては、限られた紙面（A4用紙1ページ以内）で、プライバシーの配慮を重要事項として、特に形式を定めない自由記述で自校の対応を報告していることから、対象者の学年、健康相談対応期間、対応後の経過など十分に読み取れない事例も少なくない。保健室で養護教諭が健康相談を行った場合は、担任、関係教職員、管理職への「報告・連絡・相談」は不可欠であるが、その記述がない健康相談事例もある。まとめにあたっては、提出された記述に忠実に要約を行ったため、例えば「対応における連携」についても、25件中、担任との連携18件、管理職との連携7件となっているが、校内連携はどの事例でも行われていると考えられる。対応における連携については、「主な連携先」と理解いただきたい。

今後、このように事例をまとめていくつかの共通項を導く場合は、事例の収集方法を熟考し、信憑性のある結果を導き出したい。

上記のような課題はあるが、本研究は、養護教諭の対応や気付きなど生の声であり、コロナ禍の混乱に

対応した記録となったと考える。

## 5. まとめ

新型コロナウイルス感染症が流行り始めた2020年度から3年間の事例を収集した。通称「5年研」と呼ばれている研修に参加した養護教諭から出された健康相談事例から、様々な問題に対応していたことがわかった。

健康相談事例数は、学校再開直後の事例が最も多く、年を追うごとに減少していた。これは、子供たちが「新しい生活様式」を受け入れつつ学校生活を送っているからではないかと考える。3年間のうち、2020年の全国一斉の休校が明けた時期が、最も心身の影響を受けていたことがわかった。休校期間中に緊急事態宣言が発出されたことにより、外出自粛生活、直接的な交友活動の制限があり、新型コロナウイルス感染症に対する脅威が助長された。休校期間中は子供たちの安心、安全の確保や心身の居場所の確保が容易ではなかったといえる<sup>4)</sup>。そして、休校明け、感染対策のためゾーニングされた保健室へ、子供たちは不定愁訴や心の悩みをもって来室した。事例を分析する中で、多くに共通していたのは「不安」であった。

訴えの内容の背景としては、家庭、家族に問題がある事例が最も多かったが、周囲の大人も不安やストレスを抱えているため、その影響を子供が受けている。新型コロナウイルス感染拡大防止のための休校は、これまでの「夏休み」より長期にわたる休校で、様々な問題がより浮き彫りになったと考えるが、通常の「夏休み」「冬休み」等の休業明けにストレスを感じる子供や生活リズムを崩す子供たちもいる。特に、家庭に何らかの問題をもつ子供や、発達障害等自身に何らかの悩みや問題をもつ子供は、特に夏休み明けには、配慮が必要であろう。ましてや、コロナ禍で社会全体の生活様式や行動、意識の在り方が変わっていく中で子供たちの心身の健康への配慮は不可欠である。

養護教諭が行う健康相談では「連携・協働」がキーワードである<sup>5)</sup>。これは、「教員と多様な専門性を持つ職員が一つのチームとして、それぞれの専門性を生かして、連携、協働することができるよう、組織の在り方、教職員の働き方の見直しを行うことが必要である」という「チームとしての学校」の在り方にも通ずるものである<sup>6)</sup>。これからも、養護教諭がその連携の要となって、子供たちの心身の健康と安心、安全を護り、心の居場所を確保して欲しい。

## 参考文献

- 1) 文部科学省：新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校における一斉臨時休業について（通知）  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/coronavirus/mext\\_00006.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00006.html) 2020
- 2) 日本健康相談活動学会：COVID-19に伴う養護教諭の実践に関する緊急アンケート報告書（第1版）  
[chrome-extension://efaidnbmninnkcbpcqjpcglclefindmkaj/http://jahca.org/top/pdf/COVID-19\\_Vol.1.pdf](chrome-extension://efaidnbmninnkcbpcqjpcglclefindmkaj/http://jahca.org/top/pdf/COVID-19_Vol.1.pdf)  
2020
- 3) 文部科学省保健体育審議会：生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について（答申） 1997
- 4) 八木利津子：新型コロナウイルスと共存する新時代に向かう「養護実践」と「研究」の道 養護実践学研究Vol.4 11 2021
- 5) 静岡県養護教諭研究会：養護教諭の活動の実際（第3版） 東山書房 2022
- 6) 文部科学省中央教育審議会：チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申） 2015  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365657.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365657.htm)